

親子関係からみた心理的離乳への過程の分析

－母子関係から見た親子関係の分析－

幼児教育選修 岩田かおる

I. 問題と目的

私は、中学生、高校生の時期には母と対立した記憶があまりないが、大学生になり母との対立が増えたように感じている。一方、私の二つはなれた姉は、中学生、高校生の頃、母との対立が多かったが、現在の母親との関係は私よりも良好なものであるとはっきり言える。

家族でも親子関係が異なる理由として中学生、高校生のときの母との関わり方や、家庭の環境、姉と私の生活の違い、母子の互いの捉え方の違いがあるからではないかと考えた。

「子離れ・親離れ」という言葉がある。それは、どのような過程で進んでいくのだろうか。親が先に子離れをするのか、子が先に親離れをするのか、また、母親との関係は反抗期を経てどのように変化していくのだろうかという疑問をもった。その過程や親子関係の変容を研究することで、母との現状の改善や、母への理解をさらに深めることができるのではないかと考えた。

本研究では、青年期とよばれている、中学生、高校生、大学生の各時期の母子関係の違い、子の年齢によって、母親の子に対する、態度や子の捉え方に変化はあるのかを研究することで、両者の心理的離乳の過程を探っていきたくと考えている。

II. 心理的離乳とは

心理的離乳はホリングワース (Hollingsworth, 1928) が提唱した用語である。

西平 (1990) は心理的離乳を第一次から第三次までの3つの段階に分けている。

- ・第一次心理的離乳 (思春期～青年期中期) : 子どもが親との依存関係を脱却して、親子の絆を壊そうとすることが中心課題となる時期
- ・第二次心理的離乳 (青年期中期～青年期後期) : 第一次心理的離乳で得られた自律性によって、子どもが親を客観的にながめ、お互いの関係を自覚的に修復し、親子の絆の再生と強化を行うことが課題となる時期
- ・第三次心理的離乳 (青年期後期以降) : 両親から学んだ価値観を超越し、自らの生き方を確立しようとする真の自己実現を目指す段階

以上の3つの段階に分類している。

III. アンケート調査

1. 目的と方法

(1) 目的

小高 (2000) は母親との親子関係は父親との関係よりも密接ではあるが、対立に関しても母親の方が多くと述べている。本研究では、青年と母親が互いにどのような態度をもっているのか、という観点から心理的離乳を検討し、親子関係の発達の変化を明らかにしていきたい。

(2) 調査の概要

中学1～3年生、高校1～3年生、大学1～4年生の生徒、学生とその母親の計610名に、母親への態度、子どもへの態度についてのアンケートを、小高(2000)の親-青年関係尺度をもとに行なった。

(3) 分析手順

最初に、質問紙の内容の項目を、5つの系統に分けた。また、小高 (2000) において、親からポジティブな影響を受け、親との情愛的な絆も強く、親との対立が少なく、親を一人の人間として客観的にみていることに関して、「親への親和」と定めている。一方、親に服従し、親を一人の人間として客観的にみていないことに関しては、「親への従属」と定めている。これを参考に、系統1から系統5を、高得点群と低得点群に分けた。

表1 高得点群、低得点群

	高得点群	低得点群
系統1	ポジティブな影響を受けている	ポジティブな影響を受けていない
系統2	対立が少ない	対立が多い
系統3	従属関係が弱い	従属関係が強い
系統4	情愛的な絆が強い	情愛的な絆が弱い
系統5	一人の人間として認知している	一人の人間として認知していない

2. 結果と考察

(1) 母子関係

図1から図6は、三者の高得点群、低得点群のそれぞれのグラフである。このグラフから以下のことが考えられる。(高得点群におけるの最大値は100、低得点群におけるの最大値は60で表している。)

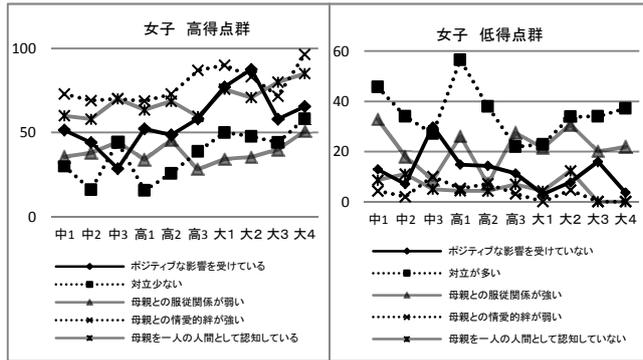


図1 女子 高得点群

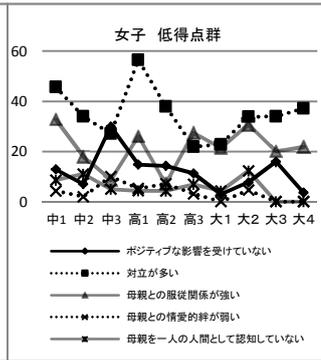


図2 女子 低得点群

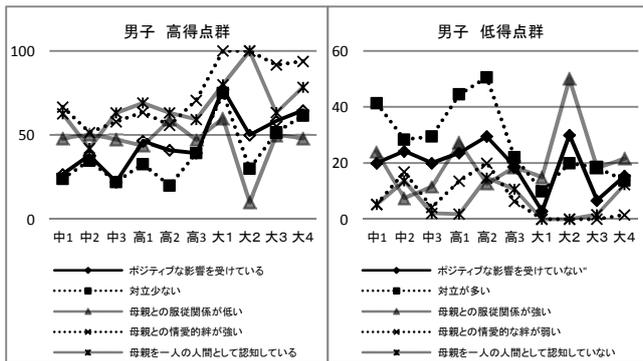


図3 男子 高得点群

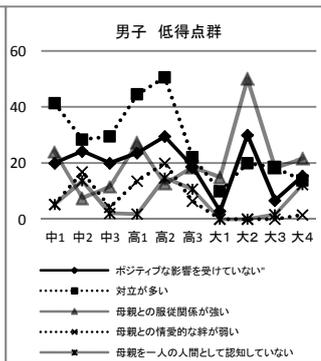


図4 男子 低得点群

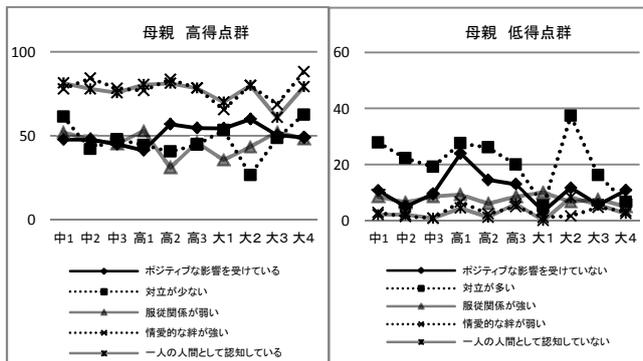


図5 母親 高得点群

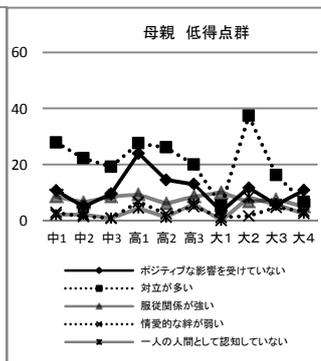


図6 母親 低得点群

母親からのポジティブな影響を受けていること、情愛的な絆が強いこと、母親を一人の人間として認知していることの方が女子は男子よりも高いことから、女子は男子よりも母親との関係性がより親密であると考えられる。また、母親との対立関係も女子のほうが強いのではないかと考える。これは、高橋(1970)や岡本・上地(1999)でも、母娘関係の密着性は強いと述べられており、今回の研究結果も一致している。

向井(2001)は、反抗期の実態を研究しており、ここでは、親子喧嘩は中学2年生で最も頻繁で、男女ともに母親との衝突が多いことを報告しており、中学2年生が親子関係のターニングポイントだと述べている。しかし、今回の研究では、女子は高校1年生時、男子は高校2年生時に母親と衝突が最も頻繁になっており、

小高(2008)よりも反抗期が遅く現れていることがわかる。

女子は、中学3年生ごろから高校1年生にかけて、母親からポジティブな影響を受けていない、対立が多い、情愛的な絆も弱いことから、この時期から親からの脱却が始まると考えられる。そして、大学生の時期に対立が少なくなっていること、情愛的な絆が強いこと、一人の人間として認知していることから、大学生の時期に母親との関係は安定すると考える。

男子は、女子よりも少し遅く、高校1年生から高校2年生にかけて、母親への服従が低く、一人の人間として認知しておらず、この時期が母親からの脱却の始まりの時期だと考える。大学生の時期に高得点群の最も高い得点が5つの系統すべて集まっていることから、母親との関係が安定するのは女子と同じで、大学生の頃である。

小高(2008)の研究においても、女子は、中学3年頃から母親との関係は崩れ、大学生で安定すると述べられており、中学3年が親子関係の第一の転換期になっており、高校生の終わりから大学生の初めが第二の転換期となっていると述べられている。また、親からの脱却は、女子が男子よりも早い段階から離脱が始まることも述べられている。

また、母親に関しては、家族構成や家庭環境などの差異、また國吉、高橋(2004)の研究から、夫婦関係などによって子離れの時期は異なると述べられていた。しかし、子から離れる時期は青年期の男子や女子とは異なり、まとまった時期ではないものの、母親も子と同様で、子が大学生になるころには母子関係は安定していることから、母親の子離れは、子が大学生のときに完了すると考える。

(2) 心理的離乳の過程

また、心理的離乳の過程を把握するために、各系統の平均をだし、学年別の得点と平均を比べてみた。小高(2008)を参考に、「親(子)への親和」と「親(子)への服従」の二つの要素を組み合わせ、母子関係を4つの型に分類した。

「親(子)への親和」では、高得点群の系統1「ポジティブな影響を受けている」、系統2「対立が少ない」、系統4「情愛的な絆が強い」の3系統から、「親(子)への服従」では、低得点群の系統3「服従関係が強い」、系統5「一人の人間として認知していない」の2系統をもとにしている。それぞれの型は以下の通りである。

・A型(親和が高く従属も高い密着した関係):

「親(子)への親和」に含まれる3系統のうち、二つ以上が平均点を上回り、「親(子)への服従」に含ま

れる2系統のうち、一つ以上が平均点を上回っている場合がこのタイプである。

・B型（親和が低いが従属が高い矛盾・葛藤的な関係）：
「親（子）への親和」に含まれる3系統のうち、二つ以上が平均点を下回り、「親（子）への服従」に含まれる2系統のうち、一つ以上が平均点を上回っている場合がこのタイプである。

・C型（親和が低く従属も低い離反的な関係）：
「親（子）への親和」に含まれる3系統のうち、二つ以上が平均点を下回り、「親（子）への服従」に含まれる2系統のうち、一つ以上が平均点を下回っている場合がこのタイプである。

・D型（親和は高いが、従属は低い対等な関係）：
「親（子）への親和」に含まれる3系統のうち、二つ以上が平均点を上回り、「親（子）への服従」に含まれる2系統のうち、一つ以上が平均点を下回っている場合がこのタイプである。

その結果、女子は、中学生から高校2年生にかけては、B型とC型に位置し、高校3年生でA型、大学生では、A型とD型に位置していた。

また、男子においては、中学生、高校生でB型、C型に位置し、大学生でA型、D型に位置していた。

女子、男子の心理的離乳の過程のモデルを図7のように表すことができる。

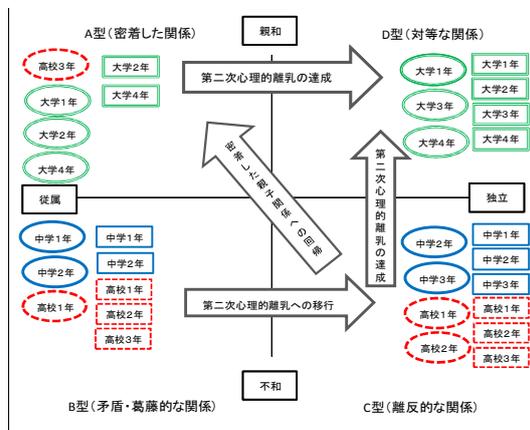


図7 心理的離乳のモデル（男女）

小高（2008）は、A型→B型の過程を第一次心理的離乳の始まり、B型→C型を第二次心理的離乳の移行と定めている。中学生から高校生まではA型→B型→C型という道筋をたどり、心理的離乳の過程はA型→B型→C型→D型という道筋をたどるタイプや、A型に回帰してD型にいたるタイプなどがあると述べている。しかし、今回、中学生の女子は、中学1年生と2年生がB型（矛盾・葛藤的な関係）に位置し、中学2年生から高校2年生がC型（離反的な関係）に位置している。また、男子は、中学生1年生、2年生と高校

生がB型に位置している。C型には中学生と高校生が位置している。男女ともに、中学生、高校生の時期にA型に位置している時期がないことから、第一次心理的離乳のはじまり（A型→B型）は、男女とも中学生よりもはやい段階から始まっていると考えられる。

女子に関しては、中学1年生と2年生の時期が第二次心理的離乳の移行時期に対応し、中学2年生から高校2年生までが崩れた母親との関係を修復し、密着した母子関係を新たに作り上げる、「密着した母子関係への回帰」の時期であると考えられる。そして、高校3年生から大学生の前半にかけては、A型（密着した関係）に位置し、大学生後半にかけてD型（対等な関係）に移行している。このことから、高校生後半から、大学生にかけて第二次心理的離乳は達成されると考えられる。女子の心理的離乳の過程は、B型→C型→A型→D型という道筋をたどっている。しかし、大学4年生がA型に位置していることや、高校1年生がB型に位置していることから、心理的離乳の過程にもいくつかの道筋や個人差があることが考えられる。

男子に関しては、B型に中学1年生、2年生、高校生が位置し、C型に中学生と高校生が位置しており、大学生ではA型とD型に位置している。このことから、男子の心理的離乳の始まりの段階は幅広く、過程にも様々なタイプがあるのではないだろうか。

中学生の前段階で、第一次心理的離乳を経験し、中学生または高校生の段階に、第二次心理的離乳移行期の段階を経て、中学3年生から高校生の段階で密着した母子関係への回帰をし、大学生で母子関係が安定するという、B型→C型→A・D型の道筋をたどるものや、A型に回帰し、D型にいたるものがある。また、中学1年生、2年生でB型を経て、中学3年生でC型と過程を踏んだ後、高校生でB型→C型をもう一度繰り返した後に、大学生でA型やD型にいたるケースもあった。

母親に関しては、図8のようになった。

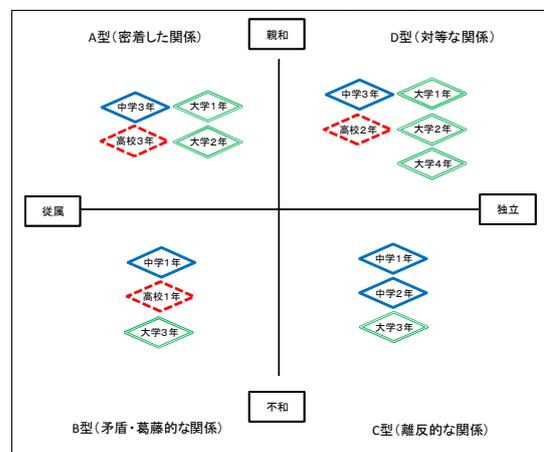


図8 心理的離乳のモデル（母親）

母親は、学年によって様々な型に位置しており、学年の変化を見ることはできなかった。渡邊（2015）は、母親は、子との距離が近い状態と遠い状態を繰り返しながら、子との関係を変化させていると述べている。また、母親は子の成長による安心・信頼を感じることや、親子間で衝突するという出来事が子との距離が遠くなることに影響していると言う。子との距離が近い状態と遠い状態を繰り返した後、親子の立場の逆転が生じる一方で、母親にとっていつまでも子は子という、相反する関係も併存している。したがって、母親は子との距離が近い状態と遠い状態を何度も繰り返すことによって、母親は徐々に子どもとの最適な距離をつかんでいくと述べている。

このことから、母親は子の成長を感じると共に、子との距離を掴むため、学年によって様々な型に位置しているのではないかと考えられる。中学1年生、2年生、高校1年生でB型、C型に位置しており、中学3年生、高校2年生、3年生とA型、D型に位置している。この中学生から高校生の時期は子が第二次心理的離乳への移行の時期である。子どもが一人の人間として自立していくという子の成長に対する喜びや安心感、第二次反抗期による子との衝突など、様々な子の姿を捉えた上で、子との距離を探っているため、様々な型に位置しているのではないかと考える。子が大学生になると、母親も子との関係はA型、D型に位置し安定しており、この時期に母親も子離れが完了しつつある。しかし、大学3年生で、B型、C型に位置していることから、子との距離が近い状態と遠い状態を繰り返した後、親子の立場の逆転したことを受け入れたり、子育ての役割を終えたという達成感があったりする一方、子はやはり子であるという感情や寂しさ、子離れの戸惑いなどのネガティブな感情も体験すると渡邊も述べており、子離れが完了していく過程で母親も葛藤が生じている時期であるのでは。

しかし、母親の子離れについては、家庭環境や家族構成、子の発達段階で変化するので結論づけるということは困難だと考える。

III. まとめ

女子は、中学1年生から高校1年生にかけ母親との親和的な関係は崩れ、従属的な関係が強くなるものの、高校2年生から大学生にかけてその関係は弱くなり、大学生で親和的な関係が強くなるのがわかった。

男子は、中学生から高校2年生にかけ、母親との親和的な関係は崩れ、高校2年生の時に最も従属的な関係が強くなる。その後従属的な関係は弱くなり、親和的な関係が強くなり、大学生で母親との親和的な関係が安定することがわかった。

また、心理的離乳の過程に関しては、男女ともに、第一次心理的離乳は中学生よりも前の段階から始まり、中学生、高校生と第二次心理的離乳へ移行し、大学生で母親との密着した関係が回復され、第二次心理的離乳が達成されるという結果となった。

青年期に子が、母親からの脱却をしていく中で、母親も子から脱却をしており、子が大学生のときに母親も子離れが完了する。しかし、その過程の中で、子の成長を喜ぶ一方、子を手放したくないといった、相反する感情と葛藤し、子との距離を探りながら、母親は子離れをしていくことがわかった。

今回の研究から、青年期の心理的離乳の過程や、母親の子離れの過程について考える良い機会となった一方で、子は中学生、高校生の時期に第二次反抗期を迎え、葛藤や矛盾の中で母親から離脱していき、その後母親との関係を安定させていく一方、母親は常に子との距離感や、葛藤を抱えながら子の成長を見守っているものだとということを知ることができた。今回の研究では、両者の親離れ、子離れについての研究だけであったが、この研究を教育の現場で生かすためにも今後は、事例などにも目を向け、両者にどのような言葉かけや支援をしていくことが最良なのかということを考えていきたい。さらに、母子の関係は、青年期を終えた後も続いていくものである。今回は、中学生、高校生、大学生の母子関係についての研究ではあったが、結婚などの家庭からの自立の際の母子関係の変化についての研究を今後の課題としていきたい。

IV. 参考文献

- ・小高恵 2000 親-青年関係尺度の作成の試み, 南大阪大学紀要, 第3巻 pp.87-96
- ・向井隆代 2001 事例でわかる思春期の親子関係-思春期を理解する-, 児童心理 12月号臨時増刊 pp.12-19
- ・高橋恵子 1970 依存性の発達の研究:III, 教育心理学研究, 第18巻 pp.65-75
- ・岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化からみた親子関係および友人関係, 教育心理学研究, 第47巻 pp.248-258
- ・西平直喜 1990 成人になること 人間の発達4, 東京大学出版会
- ・國吉裕加・高橋靖恵 2004 日本青年心理学会大会発表論文集, 第12巻 pp.24-25
- ・小高恵 2008 青年の親への態度についての発達の变化:心理的離乳過程のモデルの提案, 太成学院大学紀要, 第10巻 pp. 31-48
- ・渡邊弓子 2015 中年期の母親からみた子離れの過程と感情体験